

参考資料②

07 / 4 / 27 「演劇体験Ⅱ」

4月20日「遠藤啄郎さんと演劇を語る会」メモ

私が演劇をはじめた動機は戦争である。「生きている」という実感がほしかったためである。

- 自分がまず自由になる必要がある。開放、つまり、自分をさらけ出して、「他者」と結ぶ。しかし、それだけでは演劇は成立しない。「他者」との関係の中で、自己規制を学ぶ必要もある。
- 演劇にとって最も重要なのは「相手役」である。やりとりの面白さと集団で作る面白さが演劇の命である。つまり、重要なのはコミュニケーションであって、一人ではドラマは生まれない。
- 演劇を作る喜びは、「共有」である。仲間との軋轢があるからこそ、相手のことを考え、自分のことを考えて、舞台を完成させた時に、達成感を得られる。
舞台を作ることを通して「他者」の考えを知ることができる。プロの演劇現場は俳優だけではなく、裏方もいれば、制作も宣伝の担当者もあり、軋轢がある。演劇は社会的な行動である。演劇を通して「生きていてよかった」という気持ちになれる。それは、世間を渡る力になる。
「共有」こそが演劇の特性であり、映画のような複製は不可能な表現である。
- 演劇には「他者」になる魔法のような面白さがある。人間は日常も何らかの「役」を演じている。舞台上で「他者」になりきれば、自分を活性化し、世界と渡り合うエネルギーが得られる。
- 演劇に必要なのは、声・動きである。特に声であり、演劇には人の心に届く言葉が最も重要である。また、それだけではなく、演劇には、脚本を読み解く力が必要である。演劇を通して、学校で学んだことを再構築することができる。